

ルックイーストが創出した絆——文化論的に回顧する

富沢 寿勇 静岡県立大学

2012年はマレーシアのルックイースト政策30周年ということで、年末に開催されたJAMS研究大会でも、これを回顧し今後を展望する特別シンポジウムが実施されたのはまだ記憶に新しい。個人的には、このシンポジウムでアクマル・アブ・ハッサン氏と初めてお会いする機会を得たのが幸いであった。多くの会員がすでにご存知の通り、アクマルさんはルックイースト政策第7期留学生として群馬大学に留学し、その後、東京三菱銀行、マレーシア貿易開発公社大阪事務所勤務、ジョム・マレーシア代表取締役社長を経て、ハラール産業を広めるためにマレーシア・ハラール・コーポレーションを日本で立ち上げ、昨年はルックイースト政策で最も成功したマレーシア人ということでナジブ首相から表彰された。

私はルックイースト政策がマハティール首相によって宣言された1981年から83年にかけて、文部省(現・文科省)のアジア諸国等派遣留学生としてマレーシアに滞在中であった。そしてルックイーストが本格的に展開された1982年の4月頃に運悪く急性肝炎を発症し、ヌグリ・スンビラン州でのフィールドワークを一時中断し、やむなく静養せざるを得なくなった期間、日本的経営とは何かを解説した英語版のペーパーバック(確かアベグレン著だったと思う)をマラヤ大学の書店で入手し、毎日仰向けで寝たまま夢中で読んだ記憶がある。ルックイーストが叫ばれ始めた国で、日本人が日本のことを知らないのは「恥」であると思ったこともあったのであろう。

さて、ルックイーストといっても、それがマレーシアの専売特許にとどまらなかったことは一般にどこまで知られているのであろうか。もちろん、マハティールがルックイースト政策20周年の記念演説で指摘していた通り、マレーシアが同政策を導入する遥か以前、特に日露戦争後の東アジアの人々はすでに近代化の模範としての日本をルックイーストの対象としてとらえていたとされる。しかし、マレーシアの同政策開始以降も、さまざまな国や地域が「ルックイースト」政策を表明したのも、文化論的に見ればまことに興味深い事実である。たとえばインドはマレーシアより10年遅れの1990年代初めにルックイースト政策を打ち出した。その場合のイーストとは、安全保障や経済関係の絆を強化する目的で、当初はインド北東部からバングラデシュやミャンマーをはじめアセアン諸国を主に指し、さらに最近ではモンゴル、中国、日本、韓国などを含む東アジアに広げられている。アフリカのジンバブウェでとられたルックイースト政策のイーストとは中国を中心としたアジア及び、一時は東ヨーロッパをも指す概念として使われたこともあるようだ。同じくナミビアで最近言われるルックイーストも経済関係の密な中国が主な対象のようである。サウジアラビアでは2005年にファハド前国王が亡くなるまで親欧米政策がとられていたが、アブダラー国王の即位以来、中国、インド、パキスタン、東南アジア、そして日本などを重視する外交政策に転換され、在地メディアはこれをルックイーストと称している。これはまったくの余談で時間も遡る話だが、日本ではJR東日本が「Look Eastキャンペーン 秋 1988」を打ち出し、加山雄三による主題歌とともに「ひがしは、ひとがブラボーです。」と意味不明

(!?)の観光宣伝が行われたようである。マレーシアのルックイーストは日本の地理の教科書にも載るようになったため、ある生真面目な人が正距方位図法でクアラルンプールを中心に方位を探ると、東京は42.5度で北東よりも北寄り、韓国はさらにもっと北寄りに位置することになり、要するにイーストという表現は妥当でなかったとのことである。もちろん、マレーシアのルックイーストは、近代化モデルとしての「ウェスト」のアンチテーゼとして提示された代替モデルであり、その意味でのイーストが重要なのであって、実際の地理上の位置は大した意味をなさない。イーストがどこを指すにせよ、要はウェストでないイーストに着目するということである。西洋(オクシデント)から見た東洋(オリエント)にせよ、東西冷戦体制の時代において西側から見た東側にせよ、東は一般に負のイメージで認識される傾向が強かった。政治経済次元のみならず文化次元も含めた西洋／西側主導のヘゲモニーや支配の様式を少なくとも払拭すべく、ルックイーストは展開してきたともいえる。

ところでマレーシアのルックイースト政策とイスラーム化政策は従来別個のものとして論じられてきたように思われるが、両者は同時代的に併行して進められてきており、私には同一軌道上の現象に思えてならない。一言でいえば、どちらも近代化のための方策であり、精神面の質や倫理性あるいは宗教性の確保によって裏打ちされた開発をめざしてきた点で共通している。ルックイーストにおける日本は勤労倫理や規律正しさ、そして「恥の文化」によって維持されてきた質の高いものづくりへの姿勢などが手本とされた。他方、イスラーム化政策では、宗教的、倫理的開発と物質的開発とが車の両輪のように互いに連動しながら展開して行くことが基調として追求されてきた。

東西冷戦体制が崩壊し、市場経済原理主義を軸とするグローバリズムが地球上の至る地域に触手を伸ばし始めた矢先に、マレーシアを中心としたイスラーム圏で新たな産業が勃興することになった。ハラール産業である。これは世俗的な市場経済では満たされないムスリム消費者のニーズを主に念頭において、イスラーム的価値で再編した代替的な市場経済を新たに構築する試みという側面があり、マレーシアにおいてはイスラーム化政策のグローバル次元における延長線上にあるといっておくべきだろう。

昨夏、委員会出席のために新橋から文科省に向かって歩いていた途上、偶然マレーシア・ハラール・コーポレーションの看板を見かけた。最近の私はもっぱらハラール産業研究に引き込まれ、マレーシアを中心に東南アジア、東アジア、中東、北アフリカなどにも出かけるようになったが、これがアクマルさんの会社であることを知ったのは比較的最近の話である。灯台下暗しとはこのことである。JAMSのシンポジウムでアクマルさんは、これからの日本はムスリムの住民や旅行者を大勢呼び込むような環境作りが必要だと説き、ハラール産業の日本での展開の可能性と夢を熱く語った。実際、本邦でもすでに関西などではハラール・ツーリズムが企画され、九州ではハラール食肉・食品も生産され始め、民間やNPOのハラール認証団体も登場するようになった。とはいえ、日本のハラール産業はまだまだ開発途上にあり、そのグローバル展開のためにも、しばらくは「ルック・マレーシア」も必要であろう。私は過去30年に及ぶマレーシアへの旅で辿り着いたハラール産業を媒介に、ルックイースト元留学生のアクマルさんと遭遇したことで、マレーシアと日本の「絆」でつながる円環が自分の中で完結したような気がする。

初出 『JAMS News』第54号(2013年3月)